

今日はざっくり黙示録シリーズ2ですが、シリーズ1との間に随分間隔があいて…。

シリーズ1、覚えてはりますか？ あまりにも昔の事なので「何言ってはったかな。よく分からない。」なので、ちょっと復習します。

その前に、次の日曜日、息子がある国家試験を受けます。合格を願い、祈っているのですが、国家試験の受験の問題で、今エライ事が起こっているのです。

人工知能のベンチャー企業が始めた“資格スクエア”というサイト。これは、合格率が極めて低いと言われている難関の国家試験の問題を、人工知能によって予測させるというサイトです。

この会社が最初に手掛けたのは宅建・宅地建物取引士。この資格を持っている人がいないと不動産業を営む事はできません。合格率は僅か15%という国家資格です。今年の宅建の本番試験でどんな問題が出るか、過去問や色々な問題集を人工知能にディープラーニングさせて予測させたら78%的中。

しかも問題の文章もそのまま。宅建は75%正回答したら合格です。それが78%同じ問題。

つまり、ここのサイトで勉強したら、出る問題が前もって分かっているのです、それを集中的に準備すれば合格率が限りなく高くなるという事です。

ここの社長が「宅建でこんなに高い数字が出るとは思っていなかった。次は日本で1番難しい国家試験、司法試験をやってみよう。」

未来の問題で“未来問(みらいもん)”。この人工知能に(究極のカンニングじゃないかと思いますが)、司法試験の予備試験をやらせたら60%命中。司法試験の合格ラインは6割だから、他の勉強は全部なくていい。未来問にだけ取り組んだら、日本で1番難関の国家試験は難しくない。

社長は「社労士も看護師も、来年のセンター試験も!」。こんな事されたら、どうする?

それで今、ものすごく物議をかもししているのです。「試験に合格する事がゴールじゃなくて、合格した後にそれを発揮するために勉強するんでしょ!」と。前もってどんな問題が出るかを教えたら、教えられた人は、それに回答できるように集中的に準備しますね。準備させるために、前もって教えているのです。

黙示録は「未来に何が起こるか」という事を語っている書物です。

前回話しましたが、黙示録は必ず起こるべき事について、神がイエス・キリストを通して、御使いを通してヨハネに与えたものです。

なぜ未来の事を語っているのか? 未来が来る前に、私たちに良い未来に入るための準備をさせるため。

聖書が語る未来、これから歴史はどこに向かって行くのか? もうゴールは見えています。

どんなゴールなのか? 究極的に神がしようとしているのは『人類の再生プラン』

サタンによって持ち込まれた罪によって、人間の世界に罪が、人間の中に原罪が、暴走し反逆する性質が入り、世界も人類も台無しになってしまいました。神が最初に意図していた世界と人間の生き方を今の人はしていません。この世界は、神が本来、罪が入る前に持っていた世界とは全く違います。

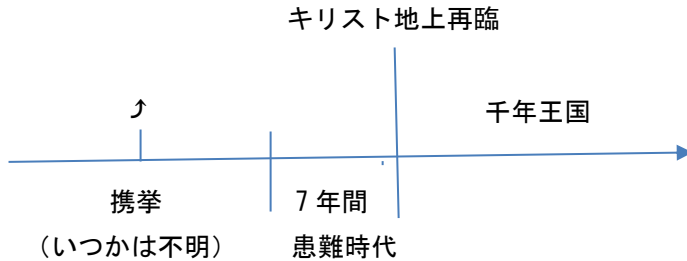
罪によって台無しになった世界と人を、もう1度ピカピカに再生する。

この、人類再生のための神様の救済プラン（マスタープラン）が、**黙示録**に啓示されているのです。

将来、どういう事になるのか？ 罪が入る前の世界に戻り、憎み合ったり、呪い合ったりしない究極の理想的な人間に回復するのは、いつ、どのタイミングで起こるのか？

それは、キリストが地上再臨した後の時代に起こります。

歴史の座標軸で見ると



ある時キリストが地上再臨して、その後、千年王国という素晴らしい時代が始まる。地上再臨から逆算して7年間、人類は最も苦しい時代（患難時代）に突っ込んで行く。

「キリストが地上再臨した時に何が起こるか。」「患難時代にどんな順番で何が起こるか。」それらを非常に詳しく書いてあるのが**黙示録**です。

患難時代に突入する前に、大きなしるしがあります。それがいつかは分かりませんが、キリストが空中までやって来て、地上の教会（本物のクリスチャン）だけを全部、天に引っ張り上げる。あるタイミングで、本物のクリスチャン（教会）は、世界から忽然と姿を消します。これを「携挙」（けいきよ）と言います。

携挙される時に、教会の身の上で起こる事・その後の7年間の患難時代で起こる事・患難時代の後で再生された人類の歴史の最後、に至るまでを預言しているのが**ヨハネの黙示録**。

これが1回目の復習。「そんなん、聞いた事ない…」今聞いて下さった。何回も聞かないと忘れますから。前回の**黙示録 1:1-8**は手紙や本でいうと前書き・前文。いよいよ今日から本文・本論に入っていきます。

これは『**ざっくり黙示録**』。何回もざっくりじゃない方向に行きかけたのですが、それをやったらもうダメです。多分皆さん、突っ伏すんじゃないかと。それで、「聖書がよく分からない」というノンクリスチャンの方を対象にしたいので、クリスチャンには少し物足りないかと思えます。それは分かってます。分かってるんですけど、そこに徹してお伝えしたいと思っています。

今日は**黙示録 1:9-20**を4つのポイントで見えていきます。

- 1) 黙示録を書いたヨハネの自己紹介；ヨハネがどんな状況にいたのかの説明。
- 2) ヨハネがパトモス島で見た栄光のイエス・キリスト（姿・特徴）
- 3) イエス・キリストの自己紹介
- 4) 黙示録の構造

1) 黙示録を書いたヨハネの自己紹介；ヨハネがどんな状況にいたのかの説明

黙示録 1:9 私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり、神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。

ヨハネはイエス・キリストの 12 弟子・12 使徒の 1 人ですね。
彼は自分が置かれている状況について説明しています。

神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。

ヨハネはパトモス島に島流しになっています。島流しになった理由は、神のことばとイエスの証し。神の言葉/聖書の言葉を用いて、「イエスこそ人となられた神。イエスこそ救い主。我々が受け入れ、礼拝すべきお方」と証したために、当時のローマ皇帝の逆鱗に触れて島流しになりました。それがドミティアヌス皇帝で、自分を神として拝む事を強制した人です。これは前回お話ししました。

世界中どこでも、人が与える刑罰の 1 番重いものは死刑です。死刑の次、2 番目に重い刑罰は何か？世界のどこを見ても、歴史上の色々な事を調べてみても同じ。島流し。どういう人が島流しになるのか？権力者は本当は死刑にしたいけど、死刑にすると却って民衆の反発をくんだり、死刑にする事で英雄視されたり、後々やばい事になりそうな高貴な人物・影響力ある人物

日本でも八丈島や佐渡島、色々ですが、島流しにされた人は無名の罪人ではありません。たとえば、鎌倉幕府討幕を企んだ後鳥羽上皇（ごとばじょうこう）。天皇が討幕を企んだからって処刑できますか？処刑したいのは山々だけど、それをやったら後の反動が怖いという事で島流し。

影響力があつて人々を感化する人、大勢に見られて人々と繋がっている人ほど、それを完全に切り離して、絶海の孤島に缶詰め状態にするとメンタルが壊れる。島流しの間に壊れた人はたくさんいます。

AERA という雑誌で、高村友也（たかむら ともや/1982-）さんの記事を読みました。東大哲学科を出て、慶應大学哲学科の大学院、博士号を取る前に途中で退学。大学院をそろそろ卒業して就職しないと…進路は 2 つ。1 つは研究者としての道を歩む。しかしその時は、哲学の研究に余り魅力を感じなくなっていた。もう 1 つは就職。だけどそれもしたくない。

なぜ就職したくないか。哲学者だから一々理屈っぽい。今の日本社会、社会人になって結局は家を筆頭に、非常にハイコストな物を買ってローンを背負い、その返済のために猛烈に働き続けて、最後は死ぬ。虚しくないか。それは、二十日鼠が輪の中を高速回転でずっと走っているけど、一步も進まないようなもの。「そんなん嫌や。」哲学者だから考えてしまう。家なんか箱みたいな物なのに何千万もお金かけて、そのために自由な時間を捨て、パワハラを受けたり、嫌な上司や客に気を遣って、1 回しかない人生を終わらせてしまうのはウンザリだ。

そこで山梨県の雑木林に、広くて誰も来ない土地を 70 万円で買い、10 万円で自分で小屋を建てました。電気は全部ソーラーパネル。水は湧水を汲んで来て、誰にも会わないで自由に生活する。これなら月 2 万円で生活できる。年に 2 か月働けば残り 10 か月は自由。そんなライフサイクルを確立した。寝たい時に寝る。起きたい時に起きる。好きなだけ本読める。借金を背負う事もパラハラを受ける事もなく、体調もいいし人生をエンジョイして、こんないい事はない。1 年ほどしてブログを発信したらすぐに評判になり、それが書籍化されます。これがまた売れて、印税だけで 1 年に 2 か月も働かなくていい。その後、尚 2 冊の本が出ました。

ところが、5 年目に入った時に体調が狂って来たのです。

誰にも会わず 1 人だけで自己完結する生活は、良い時は良い。だけど、ネガティブな感情や否定的な思考にはまり込んで行った時、「それ、ちょっと違う」と言ってくれる人がいないので、歯止めなく・限りなく否定的になって行き、どんどん暗くなる。ある時、好きな本を読んでいて、突然息が止るような感じで動悸がし、パニックになって下山しました。そして、その小屋に戻るのが怖くなったと。それで友人の家やゲストハウスを転々としながら「これからどうして行くか、手探りの状態です。こんな最高の生き方はないと本に書いたけど、撤回する本を書きます。」

人間は交わりの中で成長するんです。誰とも完全に関係を切って、自己完結する生き方で正気を保つ事はできません。彼は自分で飛び込みました。でもそんな状態。それが、時の国家権力によって無理やり、面会できない所に放り込まれるのです。

パトモス島には水源地がありません。という事は人が住んでない。外から水の補給がない限り、誰も生きて行けない島に送られた。なぜ送られたのか。自分はどのような状態、状況にあるのか。

黙示録 1:9 私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり、

当時のクリスチャンはイエスを信じるのと引き換えに、3点セットで、ある賜物をもらいました。それは、イエスにある苦難と御国と忍耐。御国だけ欲しい。苦難は要らないと思う。

しかし、島流しにされても精神が壊れる事なく、ものすごい復活劇を果たした有名な人物がいます。マンデラ大統領（1918-2013/任期 1994-1999）投獄期間は 27 年。皆さんの年齢から 27 引いたら〇〇歳。その時からずっと投獄。27 年間の内の 18 年間は、南アフリカの首都ケープタウンから沖合 3 kmにあるロベン島。この島の周りは潮流が非常に激しくて鳴門の渦。ものすごい渦なので人が容易に近づけない。そういう島に刑務所がある。

なぜぶち込まれたのかというとアパルトヘイト。「我々は南アフリカで生まれたのに、なぜ祖国で人間扱いされないのか。皮膚の色の違いで黒人が白人から差別され、人間扱いされずに動物みたいに。おかしいじゃないか。人間は平等ではないのか。南アフリカを平等な民主主義の国にしたい。」それで活動するのですが、当時の国家体制に激突する事なので放り込まれたのです。

投獄されないようにする事もできました。つまり「差別 OK。不当な扱い、黙ってます。黒人は下。ハイ。」そのように、従順にペコペコしていたら、こんな目に遭わなくて済んだ。でも「人間として、これは許せない」と声を上げたので、苦難を受ける事になったのです。そうして 27 年間、ずっと法学・語学・色々勉強し、出所した時リーダーとして国を導いて行くために必要な準備をして行きました。

いつ出られるかも分からないのに、なぜ長い間耐える事ができたのですか？ 励ます人たちがいたから。実は看守たちです。マンデラさんは獄中にいる時にお母さんが亡くなった。また、大好きな息子が 1 回だけ面会に来たのですが、その子が事故で亡くなった。息子はマンデラさんが連行される時、着ていた服を「これをお父さんだと思って、これを着て、僕が家族を養うから心配しないでね」と。「せめて葬儀に出たい。」でも却下。人間として、これぐらいは許されてもいいだろうという事を次々に剥奪される。

だけど、彼は悪い事をしたのではないと看守自身が知っていました。それで、モラル的に彼の方が優れ

ていると気づいた看守たちは、彼を励ましたり、外で起こっている事をチラチラ言うようになります。「“ロベン島のマンデラ釈放”が、今世界中で潮流のようにになっているぞ。」マンデラの周りはアパルトヘイトの南アフリカ共和国が取り囲んでいるけど、南アフリカ共和国を取り囲んでいるのは「マンデラを助けるべきだ」という声。「出られる日は近いぞ。君の理想は遠ざかるのではなく、あり得る事なんだ。」その励ましを聞いているのが、忍耐の原動力になったのです。

なぜヨハネはパトモス島にいるのか？

黙示録 1:9 あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている

イエス・キリストにある苦難。クリスチャンは反政府主義者・反政府運動をする人ではありません。聖書は、「どんなに神を恐れない独裁者であっても、「えっ」という指導者であっても、その指導者たちのために、正しい政治ができるように祈りなさい」と勧めています。クリスチャンたちは、ドミティアヌス皇帝に対して「殺してやろう」というような運動はせずに、彼のために祈りました。

ただ、指導者としては敬意を払い従うけれど、できない事が1つあります。神が禁じている事を、指導者が強制力を使ってさせようとする時には「NO!」「できない!」ドミティアヌスは「私を神として拝め!」。それ以外の事ならやります。でも、それはできない。

その時「はい、拝みます」と言えば、パトモス島に流されなくてもよかったです。だけど、イエスを神として告白している者たちは、イエス以外の人間を神として拝む事はできない。だから「妥協がないのか!」と流されました。しかし、イエス・キリストが地上再臨した時、必ず御国が来る。必ず来る。だから待てるのです。

忍耐は我慢ではありません。どう違うのでしょうか？我慢は辛抱とも言いますが、辛抱ってスゴイ字ですよ。「辛さを抱く」。抱き枕は気持ちいい。サボテンや剣山を抱いて寝たら血だらけ。痛い・辛い・怖いのを抱きしめるのが辛抱。がまん、ガマン、我慢!!
これは聖書が言う忍耐ではありません。忍耐とは、必ず来るものを待つ態度の事。神が約束した限り、必ず実現する。何が来るんですか？御国! だから、苦難と御国と忍耐は3点セット。

2) ヨハネがパトモス島で見た栄光のイエス・キリスト (姿・特徴)

黙示録 1:10-11 私は主の日に御霊に捕らえられ、私のうしろにラッパのような大きな声を聞いた。その声はこう言った。「あなたが見たことを巻物に記して、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアに送りなさい。」

主の日は、旧約聖書にも新約聖書にもたくさん出てくる言葉ですが、基本的には患難時代。神の裁きがかかる期間の事。日は24時間ではなく期間。患難時代。ここでは勿論、まだ患難時代に入っていません。主の日はギリシャ語で「クリオーヘメラー」。「クリオー」は「主の」。「ヘメラー」は「日」

ところがここの主の日は、クリオーヘメラーではなくて「クリアコーンヘメラー」。「クリアコーン」は形容詞で「主的」。「素敵」ではない。神様の・主ご自身の日。多くの注解書が日曜日としています。聖書で日曜日を主の日と言っているのは1か所もありません。日曜日は必ず「週のはじめの日」。

では、ここの主の日(主的な日)とは何か？これは特定の曜日ではなく、ヨハネにとって、神の臨在のただ

中に置かれた日の事。パトモス島にいる事を全く忘れ、触れたら届く所に栄光のキリストがおられると感ぜられる、神の臨在に完全に包まれた日。そう捉える方が聖書的だと思います。

現実には孤独です。ヨハネは7つの教会を訪問してよく知っているのに、多くのクリスチャンの事も心配だし、いつ出られるのかも全然見当がつかない。

しかもこの時は、キリストの復活から約65年後でヨハネは超高齢者。キリスト復活の時、彼が20歳なら85歳、25歳としたら90歳。2000年前の90歳って、どこでもDNA 凄い人いますが、すごい事ですよ。

そういう時、パトモスに置かれているのを忘れてしまうような天からの臨在が、栄光のキリストが、ハグするように下りて来た。そして御霊に捕らえられ、御霊のただ中のように、非常に霊的な、神様からのメッセージを受け取り易いコンディションにされた時、私のうしろにラッパのような大きな声を聞いた。ラッパのようなだから、ラッパが喋ったんじゃない。「ような」

後輩に陸上自衛隊の空挺部隊に入った人がいます。そんなに大きな体の人じゃないけど、ある事があって「エリート部隊に入るんだ!」。空挺部隊は落下傘部隊で一番厳しい。習志野で、ものすごい訓練。自衛隊も軍隊と考えると、軍隊では今でも命令はラッパでやります。起きる時は起床ラッパ、寝る時は消灯ラッパ。聞き間違いがあったらダメなので、明瞭に、誰もが聞き間違えないような合図を使って命令が下る。あまりにも訓練が辛くて、消灯ラッパの途中で瞼がくっつきそうになって、途中から起床ラッパに聞こえるんですって。つまり、寝てる時間が体感ではゼロだと。

ラッパは明瞭な合図。響き渡るような、明瞭に語る声が後ろから聞こえた。

高速道路で渋滞している時、後ろからピーポーピーポー、サイレンが聞こえる事がありますね。

その時、バックミラー見ませんか?「消防車かな。パトカーかな。救急車かな。パトカーやったら俺かな?」「道、譲って下さい!」と、どんどん警告のサイレンが聞こえたら、後ろを見たくくなりますよね。

明瞭な、今まで聞いた事がないような音色で、ラッパのような声が聞こえた。

黙示録 1:11 その声はこう言った。「あなたが見たことを巻物に記して、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアに送りなさい。」その声は、ヨハネが一番気にかけている人たちの事を語ります。「会えない状態になっている兄弟姉妹に、あなたが見た事を書き記しなさい。」

黙示録 1:12 私は、自分に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。

ある人は「声を見ようとしてはおかしい。聞こうとしてだ」と。ここは「語っている人を見ようとして」という事です。ざっくりだから。

黙示録 1:13 また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。その方は、足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。

ここから、ヨハネが見た栄光のキリストの姿が出て来ます。なぜそれが分かるかというと、人の子のような方。「人の子のような方」とか「人の子」は、メシア（救い主）の称号・別称・タイトル。

聖書を知らずに日本語の常識で読むと「人の子」はどのように使いますか?「所詮は人の子」というのは、やっぱり完璧じゃない。不完全なところがある。弱点を持っている。

ここの「人の子のような」はメシアです。

人の子のような方の特徴を全部で10個、栄光のキリストの胸、頭、目、足、声、右手、口、顔、色々な特徴について語っています。ですが、1つずつ見るんじゃなくて、**ざっくり黙示録**なので3つだけ。

キリストの特徴 ①

頭/かしらに注目すると、**黙示録 1:14** その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く、

この象徴をどう解釈するか。黙示録の中に象徴の説明がある場合は、それを見るのがいいです。黙示録の中に象徴の説明がない場合は、黙示録以前に書かれた聖書の中に、これと同じような表現があるかを調べると良い。黙示録は聖書全体の1番最後なので、「読者はそれ以前に書かれた聖書が頭に入っている」という前提で書かれているから。

ダニエル書 7章は人類歴史の終わりに神が世界を裁くという場面。「人間が人間を支配する時代の後、キリストが全人類を統治する時代が来る」という預言が書いてあります。

ダニエル書 7:13-14 私がまた、夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が 天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。

人の子のような方が 天の雲とともに来られた：人の子のような方はメシア。メシアが天の雲と共に来られる。これが地上再臨のシーン。その方は『年を経た方』のもとに進み：年を経た方は父なる神/父なる創造主なる神様。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない：これが千年王国。地上再臨以降の事が、ここで書いてあるのです。

ダニエル書 7:13 『年を経た方』（父なる神/創造主なる神）について、

ダニエル書 7:9 私が見ていると、やがていくつかの御座が備えられ、『年を経た方』が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭髮は混じりけのない羊の毛のよう。

雪のように白く、混じりけのない羊の毛のようという描写は、父なる神の描写です。

『年を経た方』（父なる神）が座に着かれた。何の座か？

ダニエル書 7:10 さばきが始まり、いくつかの文書が開かれた。

年を経た方は裁き主として、裁判官の座に着かれたという場面。この裁判官の座に着かれた父なる神様の描写が、**黙示録**ではイエス・キリストにあてられている。つまり、ヨハネが見たイエスは裁き主です。

黙示録 1:14 その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く、

「読者は有名な**ダニエル書 7章**を当然知っている」という前提で、この表現がされているのです。

ダニエル書 7章で表現されていた父なる神が、ここでは栄光のキリスト。

つまり、イエス・キリストは父と全く等しい神。人となられた創造主。

「父なる神とイエス・キリストは同じ神/創造主です」という事をここで言っているのです。

キリストの特徴 ②

黙示録 1:12-13 私は、自分に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。

燭台とは灯火（ともしび）の事です。

ユダヤ人は、安息日に燭台を2本立てて火を点けます。

だから、1本の燭台が7つあって、その真ん中にイエスがいたという人もいる。

7本の枝が出ている燭台をメノラーと言いますが、聖書で燭台といえばメノラーに決まっていると言う人もいます。どちらであるかは限定できません。

いずれにしても、7つの金の燭台があって真ん中に人の子が立っておられた。



メノラー
(Wikipedia)

では、金の燭台とは何か？

黙示録 1:20 あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について。七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

7つの教会は、先程出て来たエペソから始まってラオディキアまでの教会。

その7つの教会の真ん中に、栄光のイエス・キリストが立っている姿を見た。

7つの教会を表している燭台は金。金は栄光を表す価値のあるもの、非常に尊いものです。

実は、7つの教会にはそれぞれ問題がありました。欠点があり、深刻な問題を抱え、トラブルがある7つの教会。しかし、これらの教会は、イエスの目には尊い金に見えている。それぞれ独立しているこれらの燭台は、光を持った人の子イエス・キリストを示しています。

それぞれの教会は問題があるけれど、イエスから見たら金の燭台。

これは、神がクリスチャンの共同体を非常に尊いものとしてご覧になっているという事です。

『食べログ』分かります？ 飲食店に行って、ネットに勝手に星つける。5つとか2つとか。お店にとっては油断できない。変な評判立つと客が来ないから、見られているという意識で一生懸命やるという点ではいいと思います。でも、評価が低い店で、すごく旨い所がありますやん。何に基づいて星をつけるかというと、満足を得たらたくさんつけるけど、自分が満足するサービスを提供できない店は低い。受けたサービスに不満があれば低い。良かったら高い。

飲食店に対してはいいと思いますが、時々、教会批判ばかりする人がいるでしょ。

「この教会、なんや！ 十字架もないし、暑すぎたり寒すぎたり、出て来るお茶も湯のように熱いわ。」「A教会は線香臭い。B教会はやかましい音楽ばかり流して、C教会は催眠術みたいなメッセージやった。D教会は高齢者ばかりで、ワシは老人ホームちゃうわ。」

特にクリスチャンになって、色んな教会を転々と渡り歩く人。なぜ渡り歩くかというと、自分を満たすようなサービスが提供されないから。飲食店なら、提供されるサービスが不満なら「星1つ!」でいい。だけど「教会はクリスチャンが満足するようなサービスを提供するために存在する」と思ったら、どんな教会に行っても満足しません。

教会はイエスから見たら全部金。キリストは教会を『キリストの花嫁』と言っているんです。

もし私がこういう事を言われたらどうですか？「私、高原さんは好きなんですけど、高原さんの奥さんは苦手なんです。」辛いですよ。「私、キリストは好きだけど、キリストの妻である教会は嫌いなので、1人でインターネットで勉強してる方がいい」と言うのは、キリストの悲しみです。

ラオディキアは鉛、エペソは銀、フィラデルフィアだけは金とか書いてない。それぞれの教会には問題があるけど、キリストの目には全部金。これがキリストにある教会の立場。

もし完全な教会があったとしたら、私が加わった瞬間に、そこは不完全になります。私は不完全だから。地上に置かれているクリスチャンの共同体は、それ自体が神の目には尊いという事を、ここで語っているとします。

キリストの特徴 ③

黙示録 1:16 また、右手に七つの星を持ち、口から鋭い両刃の剣が出ていて、顔は強く照り輝く太陽のようであった。

他の描写は全部聖書に出て来るので調べて下さい。特に新改訳聖書の場合、文字の横に小さな数字が打ってあるので、それがヒントです。そこを見たら「ああ、そういう事か。」

ただ、書いてないところがあって、それが **16 節** 右手に七つの星を持ち。イエス・キリストの権威ある腕/右手に握られている **7 つの星**とは何を意味するのか？ちゃんと説明が書いてあります。

黙示録 1:20 あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について。七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

七つの星は七つの教会の御使いたち：これを見ると、**7 つの教会**にはそれぞれ、その教会を守る御使いがいるようですね。普通に読めば、そう読んでもおかしくない。私はその解釈を半分支持しています。聖書で星が象徴的に使われている時は、例外なしに御使いを表すから、この解釈は全然おかしくない。この地上はいつもサタンと色んな悪霊が活動し、教会を攻撃して常に妨害をしていると書いてあるので、教会を攻撃する霊がいるならば、守る霊がいてもおかしくないかもしれません。だけど、教会に守護天使がいるというのを、ここ以外で裏付けているのか確信できないところです。

これは私自身が思っている事ですが「**七つの星は 七つの教会の御使いたち**」

『～の～』という構文。「**教会の御使い**」は「教会を見ている御使い」という捉え方もできます。

イエスが問われる場面があって、その答えが、新改訳第3版では「『この神殿を壊してみなさい。わたしは3日で建て直そう。』『この神殿を建てるのに46年もかかったのに、あなたは3日で建てると言うのか。』**イエスのご自分のからだの神殿のことを言われたのである**」(ヨハネ 2:19-21)と書いてあります。

体の神殿とは、体に神殿が1つずつ付いている意味ではなく、神殿を体にたとえているんです。

イエスの肉体の中にキリストの霊が宿っているように、神殿は神が臨在を現す場所なので、イエス・キリストの体を通して神の臨在が現されている。**体の神殿**とは、神殿になぞらえて体を語っている。

それを適応すると、**7 つの教会は御使い**になぞらえた教会。御使いが教会の精神状態を示すとも言える。「何を言ってるん?」「どこがざっくりや。」

「御使いは精神」と思っていて下さい。なぜならこの後、御使いに対して「**7 つの教会に言え**」という内容が、教会そのものに対して言われている事ばかりなんです。

つまり、**金の燭台**とは教会の立場。イエスはその教会の実際の状態を**右手**に持っているという事は、完全に把握しているという事。色んな問題があるけど、イエスはその教会の問題を熟知し、完全に把握しておられる。それは次回から見ます。

3) イエス・キリストの自己紹介 ; 3つあります。

① **黙示録 1:17-18** 恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。

わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。

ヘブライ語には「両極端の単語を並べる事で、その間の概念を全部含む」という話法があります。

「天と地を造られた神」は天と地だけを造ったんじゃなく、天と地の間にある全てのものを含めて神がお造りになったという事。「善悪の知識の木」は善の知識と悪の知識ではなく、善でも悪でもない色んなアイデアも含めて、善から悪に至るまでの全ての知識。「ダン(最北の町)からベエル・シェバ(最南の町)」はダンとベエル・シェバではなく、ダンからベエル・シェバに至る全ての町々・村々・領域。「北は北海道から南は沖縄まで」という、あれです。

同じように「わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である」は「人類歴史の初めから最後に至るまで、全歴史のどの場面においても、わたしは生きて来てずっと見、知り、働きかけて来た。わたしの前に見落としはない。初めから終わりまで、全ての歴史を全部知っている。だから今、あなたがパトモス島にいる事もよく分かっている。わたしは生きて、働いて、あなたを助ける時空を超えた主権者だ。」

② **黙示録 1:18** わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。

死んだがの時制/動詞の態は「自発的に死んだが」。キリストは寿命で死んだのではなく、十字架上で私の罪のために、ご自分の命を献げて下さった。

だが、見よ、世々限りなく生きている。これは「3日目に復活してよみがえった。そして、あなたの罪は完全に赦された。わたしは死んでよみがえった者なのだ。」

この時ヨハネは、パトモスに流されて行き詰った状態でした。

私たちは残念な事・ガッカリする事・辛い事・ピンチにぶち当たると、つい「あの時のあの罪を、神はまだ怒っているんじゃないか?」「あの失敗が尾を引いて…」「私がいけないからこんな事になって、神様は私を怒っている」と自分を責める方向に行きます。

絶対にそうじゃない。クリスチャンの罪は全部、イエス・キリストが自発的に死んで、よみがえられた事によって終わっています。キリストにある者は、因果応報に支配される事はない。

死んで復活した、死すら解決したキリストがあなたの保証人である。これは大きな励ましです。

③ **黙示録 1:18** また、死とよみの鍵を持っている。

鍵を持っているは、自由に開け閉めできるという事。車のオーナーはキーを持っているので、自由に開け閉めできます。鍵を持っているのは所有者であり、権威者だという事。

その鍵は「死とよみの鍵」。キリストは死という扉を自由自在に開ける事ができるのです。

死んでしまったら一巻の終わりと思いがちだけど、キリストは空中再臨する時、死んだクリスチャンたちをよみがえらせます。地上再臨する時、7年間の患難時代に殉教した人たちをよみがえらせます。

死んだ人間をよみがえらせる鍵を持っている。

死に対しても命じる事ができる権威を持っている方がキリストです。

よみに*がついていて、参照を見ると「ハデス」。よみは死後、天に行く以外の全ての人が行く苦しみ

の場所・死後の世界の中の苦しみの場所。ギリシャ語でハデス。ヘブライ語ではシェオール。

ハデスの中の一部に、悪霊たちを閉じ込める穴があります。この穴をもキリストは支配している。

キリストの権威は、今の目の前の歴史上の世界だけではなく、死後の世界にまでも及ぶのです。隅から隅まで、キリストの支配権が及ばない所はどこにもない。完全支配者である方が、ヨハネに「恐れるな」と言って下さった。これは本当に、迫害下のヨハネには大きな励ましになったでしょう。

4) 黙示録の構造

黙示録 1:19 それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ。「見たこと」は過去・「今あること」は現在・「この後起ころうとしていること」は未来

「あなたが見たこと」が**黙示録 1章**で、ヨハネが見たのは栄光のキリスト。「あなたが見た栄光のキリストの姿を書き記しなさい。」

「今あること」は**2章と3章**で、教会が地上にある携挙前の世界・教会の状況について。

「この後起ころうとしていること」は**4章から22章**で、確実に、必ず起ころうとしている事。

このように黙示録は、基本的に過去・現在・未来の時系列に書いてあるんです。

先に行けば行くほど、未来の事について書いてある。例外はありますが、それはその状況に入った時に説明します。基本的にはゴール・未来に向かって、まっすぐに、ひたすら伸びて行っている。

黙示録 1:17 この方を見たとき、私は死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。すると、その方は私の上に右手を置いて言われた。「恐れることはない。」

イエス・キリストに12人の特別に親しい弟子（12弟子）がいましたが、その中でもヨハネは非常に近くにいた人です。イエスが天に帰られる前、約3年間、寝食を共にして一緒に生活しました。

ヨハネが肉眼でイエスを見たのは約65年前。憧れの方と65年振りに再会を果たした時、飛びついたかというのできなかった。自分が知っているイエスのイメージと、今日の前にしている方の姿が、あまりにもかけ離れていたから。

知っているイエスは、本質において親切で・親しくて・優しくて・近付きやすい方。持っている力を惜しみなく使おうとし、聞き上手で、忍耐深い方。全能者で、何でも知っているのにへりくだっていて、私の色んなダメージを自分の事のように感じ取って、いつでも助ける準備をし・歓迎し・聖く正しく恵み深い方。絶対友達になりたい、もっと話したいと思う方。

受難の時は脅され・唾をかけられ・髭を抜かれ・殴られ・騙され・からかわれ・捨てられても何とも思われず、見とれるような姿ではなかった方。

でも、栄光のキリストを見た時、あまりにも違って、彼は地に倒れてしまった。しかし、ご人格は何も変わっておられませんでした。

キリストが分からない理由の1つは、神への畏れが分からなくなっているからだと思います。「神への畏れがあるのか」と私に言われたら…「はい。」ある人よりかは、あると思います。

昔、北野武が『新しい道徳』という本を書きました。「姦淫の現場で捕らえられた女の場面。イエスを問い詰めて『律法によれば、この女を石打で殺す事になっている。あなたはどのように言いますか。』イエスは『あなた方の内で罪のない者が、最初に石を投げなさい。』皆自分を恥じて、年長者から一人ひとり去って行った。」

